

子どもの参加とまちづくり学習

寺 本 潔
(地理学教室)

A Study on Teaching Plan of City by Children's Participation

Kiyoshi TERAMOTO
(Department of Geography)

1. 日本の小学校で「まち」はどう教えられてきたか

日本の小学校教育で子どもが住む町についてどのように教えてきたのか、について簡単に答えることは難しい。なぜならば、「〇〇町」という行政単位については、社会科の第3, 4学年あたりの単元でそれなりに扱ってきたからである。「それなりに」と表現した理由は、町(市・町・村)の公民館の役割や地域の水道(浄水場の働き)、ゴミ処理、火災を防ぐ努力(消防署見学や消防団)、水利・田畑に関係する先人の土木開発史の苦勞、学校や学区の100年前からの暮らしの変化(衣・食・住、交通の発達)などの内容が学習できるようなカリキュラムにはなっているからである。

しかし、それらの視点の中心は、やはり行政(公共性)側に置いてあり、各地区で作成されている社会科副読本を読んでみても判明するように著しく行政地区内の記述に限定されているのである。しかも、公共的施設の意味や役割、地域の経済活動、地域の生活変遷史も、その地域(市・町・村内の事象)のみの記述に終始し、隣接する市・町村との機能的な関係は希薄であり、子どもや母親の視点も大きく欠けていたのである。例えば、子どもの遊び場が地区でどう変化してきたのか、商店街や伝統的な街並みがどのような人々の努力で発展・保全されてきたのか、隣接する市町村とどのような経済・文化・生活の各局面で関係してきたのか、里山の自然や水利が住む者にどのような原風景を与え続けてきたのか、と言った点については、どうしても教育内容としてなじまなかったと言えよう。それはなぜか?おそらく、答え(一定の共通した徳目や合意された事実)が定まりにくいからではないだろうか。そこには、公共性や安全性と言ったパブリックな視座からの描き方が中心となり、プライベートな、ある意味で共同主観性の高い原風景や個人の町への思い、体験談、母親の視点(暮らしを与えてきた者からのアングル)は、描きにくいと判断したからにはほかならない。言わば、答えが定まっている内容に学習対象は向けられ、最初から定められた評価項目に見合う内容のもの

だけ取り上げられてきたと言っても過言ではない。

子どもが住む都市環境をハード(街並み、街灯、公園、公共施設の機能や役割、都市再開発事業に向けての行政側プラン、ライフラインの意義、交通安全施設の点検、身体傷害者へのケア施設など)な側面から教えても来なかったし、ソフト(公共施設のデザイン、商店街の雰囲気、遊び場、地名、都市の中の生き物、伝承、洗たくや水との関わり合い、ボランティア活動を支える人々、母親たちの生活史変遷など)な側面からの学習も充分ではなかった。

現代は、都市の時代となってきた。集住が密集となり過密になれば、様々な都市問題が生じてくる。農山漁村に郷里を持つ世代は減り、都市に生まれ、都市に暮らす人間が増えてきた。子どもも同様、いや大人以上に都市環境の影響を受け続けている。都市の中で、主体的に生活し、工夫し、より快適な暮らしを見つけ、作っていきける資質の形成が求められてくるのではないだろうか。その意味で都市環境学習(アーバンスタディーズ)をもっと推進していく必要があろう。

2. 桜田プランに学ぶ

地域と小学校が極めて密接に関係している時代が過去にあった。戦後、直後にアメリカからもたらされた社会科の地域社会学校の考えがそれである。地域の題材に学び、地域に出て、民主的な判断のできる子どもを育成しようと全国各地で試みられた初期社会科である。初期社会科のカリキュラムについては、平田(1986)に詳しいが、ここではその中味、つまりどんな内容が地域素材の中から抽出されたのかを、東京の桜田小学校の事例から眺めてみたい。

桜田プランと称される地域教育計画は、次のページの資料に見られるように積極的に街へ出る、都市のフィールドワークに近い内容であった。街の中の機能を学習し、街の模型も作るこの作業学習は、アーバンスタディーズそのものである。過去にこうした努力が学校側からなされた事実には驚かざるを得ない。現在の社会科が著しく形骸化し、理念中心の知識獲得に陥っている状態と異なり、初期社会科は実に刺激的な内容に富んでい

資料1 東京・桜田小学校における社会科プラン

【作業単元】私たちの郷土（五〇時間—六〇時間）

〔要項〕

1. お家をつくる（手引きとして）
建築中の家をみにゆく（一般家屋，事務所，商店）
設計図，見取図をかく，資材を蒐集する
お家をつくる，家具をそなえつける
電気・ガス，水道についてしらべる……電気屋さん，水道屋さんにゆく
浄水場にゆき，経路をしらべる
2. 家で楽しい会を開く
話し合う，グループに分れる
劇や音楽，紙芝居等を練習する
お客（近隣の人）を招待する
3. 郷土の模型図づくりをする
地図をつくる，町にしらべにゆく
グループに分れてつくる
模型図を中心にした職業しらべをする，図表に表す
4. 公園にいったみる
日比谷……近代的経営
恩賜……一般公園
浜離宮……海浜に面した庭園
芝……森林を主とした
} 目的把握
動植物の採集，挑し葉
各々の公園の相違について話し合う
5. 公園をかこんだ郷土の“絵地図”をつくる
各グループに分担する——模型図を中心として——
6. 郷土の発展をしらべる
○本をよむ，話をきく（古老） ○絵巻物に表現して発表する
7. 郷土の施設めぐりをする
放送会館，区支所，増上寺，日赤，郵便局，病院

出典：『社会科教育史資料第三巻』（1976）東京法令出版社p. 592より抜粋した。

た。

学校と地域をつなぐシステムづくりに、学校側からのアプローチは欠かせない。なぜなら、学校には街のことを学べる場や方法が蓄積されているからだ。生涯教育の場でタウンウォッチングやネイチャー（自然）探しなどのプログラムが組まれることはあっても都市（街）の環境を作るというまちづくりの視点に立ったものでない場合が多い。単なる歴史探訪会や自然愛好の機会も大切だが、そこに居住者、あるいは来訪者としての街のあり方について考える姿勢が欲しい。

桜田プランは、当時の教師たちの熱意によって地域から学ぶという問題解決学習の実験場であったが、こうした努力が長続きせず、偏差値を上げるための学習に徹していった方向性にも改めて注意する必要がある。桜田プランのような学習を現代の小学校に求めてもそれを支えるカリキュラムがない中では、かなり無理があろう。それよりも、むしろカリキュラム改造も視野に入れつつ、現在、重要性を増しつつある「新しい学力観」の視点や体験学習、生活科・環境学習の枠を大いに活用したいところである。

3. 豊田市元城小学校のまちづくり学習

(1) 基本コンセプトについて

これまで狭義には、地域の教材化は社会科中学年の「地域学習」の中で行ってきた。そこでは地域の公共施設の役割や地域で働く人の思いや努力、社会機能のしくみなどを学習させてきた。しかし、本当の地域を対象としたければ「子どもたちにとっての環境」学習は、社会科だけでは達成できない部分があろう。地域の自然、人、文化、歴史、社会、生活、風俗などもキーワードにした都市の環境学習を行うには、社会科を含む総合単元学習を作り上げる必要があるのである。

そこで「まち」というコンセプトを作り、都市環境を行政（公共）の視点や大人の視点だけでなく、女性や子どもも中心にした生活者のアングルからとらえる学習を起こす必要がある。「まち」は、自分にとってどんな姿で眺められるのか、「まち」の美しさや保全したい場所はあるか、「まち」のために自分は何ができるのか、を考える「参加型の学習」こそこれから

の地域の学習には求められてくると言えよう。「まち」学習を次の三つの柱より筆者はとらえてみた。

①「きち」学習：元城（もとしろ）学区には都市市街地にもかかわらず、いくつかの緑地に息づく草花や樹木、虫たちなどの生き物がいる。それらの街の中の生き物たちは、環境に適応しながら自分たちの住みやすい空間を持っている。そこを「生き物のきち」と呼んではどうだろうか。ピオトープやサンクチュアリに近い緑地がきっと街の中にあるはずである。そういった街の中の自然探しの学習や都市社会の中で適応させていく上の自然環境保全の気づきや態度を育成することも「きち」学習に含まれる。

また、子どもたちの「秘密基地」や大切な遊び場、お母さん方のお気に入りのスポット（井戸端会議の場所や喫茶店、街角のポケットパークなど）も「きち」である。お年寄りにもゲートボール場や寄り合い場、銭湯などの「きち」はある。住民にとって、地域の樹木にとって、地域の生き物にとって「ほっとする場所」「好きな場所」「大切に守りたい場所」「忘れることのできない場所」など、アメニティを感じる場所が、いやその場所にいる人や物も「きち」に当然含まれる。地域の中の点的存在に過ぎない「きち」は、小さいながらも「まち」環境の学習拠点になり得るはずである。

②「みち」学習：「みち」が学区の点的な学習素材ならば、「みち」はそれらをつなぐ学習路（トレイル）である。トレイルとは小径を意味する。学区の中の歩きやすい歩道や路地、神社の中の近道、子どもだけが使う子ども道、通学路など縦横に走る学習路を整備するのである。もちろん、単に教材のある場所を示すルートマップを整備するだけでなく、生活科や理科、社会科、家庭科、図工（写生）、音楽（環境音）、特別活動などの教科の内容に適合させる整備も必要であろう。生活科マップの発展形として都市環境マップ（まち学習地図）や都市環境暦なども作成したいものである。「みち」が整備されれば、父兄や街の人々にも「みち」を楽しんでもらえるよう解説用看板などを設置したり、ウォークラリー形式の学習路探検もイベントとして起こせるだろう。トレイル（みち）を整備し、「きち」の解説板を読み、四季の変化を街の中で感じる環境学習が望まれる。

③「まち」学習：「きち」と「みち」学習の成果が、自分たちの生活環境像として明確化したとき「まち」学習は展開できる。狭い郷土意識に凝り固まったり「まち」自慢がひとりよがりのレベルの低いものであったりしては、「まち」学習は成功しない。自分たちの「まち」のカレンダーやカルタ、スゴロク、絵画、研究レポート、新聞など多様な表現方法を介して、描き

出せたとき、「まち」は定着する。国際理解や消費者教育、環境教育などにも応用したい側面があるに違いない。「まち」は環境の「自分化」を果たせた学習であり、愛着のある場所が見い出せることが大切である。

「きち」・「みち」・「まち」という三つの「ち」は、それからの都市型環境教育のキーワードになる概念を含んでいる。

(2) 授業の試み

元城小学校第4学年2組の担任、斎藤充弘氏に依頼して、「まち」環境を子どもたちが調べ、ポスターセッション形式で発表する授業づくりをお願いした。社会科（総合単元）として行われたこの授業は、寺本が基本的な視点を提示し、斎藤氏がアレンジしたものである。以下に、学習指導案の一部を提示したい。

第4学年2組 社会科（総合単元）学習指導案

指導者 斎藤充弘

①日時：平成7年9月21日（木）第5校時 於 元城小学校体育館

②単元：ぼくたちの21世紀の「まち」づくり

③単元目標：

- ・21世紀に自分たちの「まち」がどのようにしてほしいか、子どもの視点で「まち」づくりを考え、自分なりに思いを持つ。
- ・「21世紀に残したいもの」という視点で学区の写真地図づくりをし、発表会を行う中で、一人一人の表現力を高める。

④ 単元設定の理由：

本校の学区は豊田市の中心に位置しており、市の公共施設や商店街などが集中している、いわゆる「下町」と呼ばれる地域である。挙母神社や古い町並み、あるいは八日市など、歴史的な景観や伝統的な行事が多く残っている反面、駅周辺の総合開発計画による新しいビルや高層住宅の建設など、現代的な面も強く現れており、町の様子が急速に変わってきている。古いものと新しいものが混在する地域である。変化の激しいこの地域の子どもたちに、「21世紀に残したいものは？」と問いかけ、自分たちの「まち」に目を向けさせることは、郷土について知り、先人の努力を学び、郷土を愛する心を育てることをねらいとするこの学年の子どもたちにとって大きな意味を持つことだと思う。

この単元の「まち」は『「21世紀に残したいもの」という視点で、自分たちの住む地域を見直す』『自分の思いを写真地図に効果的に表現する』『写真地図を使って自分の思いを発表する』という三つの活動により構成される。子どもなりの視点で「まち」探検をし、写真を使って地図にまとめ、発表会の場で自分の思いを発表する。これらの活動を通して、伝えたいことを自分なりの表現方法で相手に適切に伝える力、また、

単に古いものを残しておくだけでなく、積極的に自分たちの「まち（環境）」をつくっていかこうとする姿勢を育てたいと願っている。

本学級の児童だけでなく、本校の児童は個別にはすぐれた考えを持つ子どもが多い。しかし、自分の考えや思いを効果的に表現し、他に伝える力が弱いという傾向がある。特に、人前で自分の意見を発表することを苦手とする子どもが多くみられる。今回の実践を通して、一人一人の子どもがその子なりの表現方法を身につせ、人前で堂々と発表できる力と自信を持っていくことを心から願っている。特に、平野・犬塚・三

木は人前で話すことを苦手としているので、この機会により自信を持って話すことができるようにさせたい。また、竹澤と小笠原のグループは2人だけなので、学習の各段階でより多くの接触を図り、相談に乗ってやりたい。

資料2 「ほくたちの21世紀の『まち』づくり」の指導計画

⑤ 指導計画

15時間完了

21世紀に自分たちの「まち」がどのようになってほしいか (1)

- ・人・生き物・もの・場所・景観・雰囲気などで残したいものは

↓

21世紀に残したいものを見つけよう（まち探検1） (2)

- ・子どもの目から見た、残したいものを見つける（子どもの価値観の尊重）
- ・教師のつぶやきを聞く（古いものの価値に気づかせる）

↓

「まち」の宝物をくわしく調べよう（まち探検2） (3)

- ・グループごとのまち探検
- ・写真撮影・資料集め

↓

↓

関連教科 図工

関連教科 国語

「宝物」をポスターに表そう (4)

- ・撮影した写真を中心にポスターをつくる
- ・写真の使い方・文字の配列・色彩の工夫

↓

「宝物」をみんなに分かりやすく説明しよう (3)

- ・要点をまとめた内容の機械
- ・分かりやすい話し方

↓

「宝物」発表会を開こう (2) 本時1/2

- ・発表グループと観衆グループに分かれて発表会を持つ
- ・より高い表現力を養うための反省会を開く

資料3 本時（9月21日）の学習指導案（斎藤教諭による）

⑥ 本時の学習

ねらい

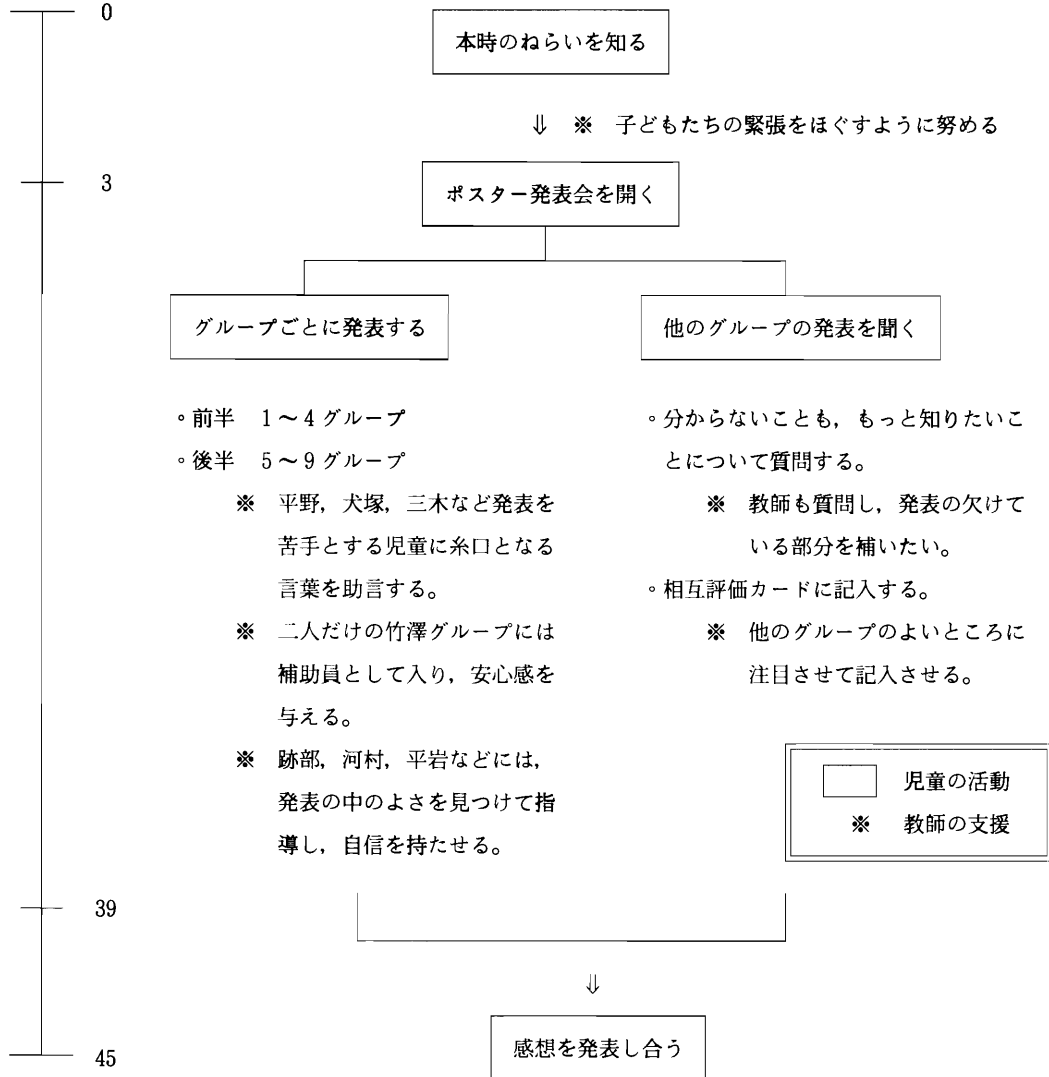
- ・自分たちがつくった写真地図を使って、分かりやすく発表できる。
- ・他のグループの発表を聞き、意見や感想を持つことができる。

準備

(児童) 写真地図 発表資料(グループごと)

(教師) 相互評価カード 長机 いす 時計

指導過程



※ 他のグループの発表のよいところを積極的に評価させたい。

評価

- ・自分が伝えたいことを聞き手にうまく伝えることができたか。(発表)
- ・他のグループの発表を聞いて、自分なりの考えや意見が持てたか。(話し合い、相互評価カード)

⑦ 授業後の児童感想と授業の写真

今回の授業を体験した児童の作文を二、三以下に掲載しよう。子どもたちが、慣れないポスターセッション学習に対し、緊張しつつもチャレンジした思いが伝わってくる。

事例1) 「体育館に入って、まずじゅんびをしたり、練習をしたりしました。じゅんびと言ってもポスターを机の上に置いただけです。始まる前は、すごく心がドキドキしていました。(中略) 先生からの説明が終ってよいよ発表会が始まります。まず、あっちゃんが発表しました。あっちゃんの発表が終わって次は、わたしの番です。お客さんは5人以上は来てくれました。お客さんは、とてもしんけんに見ていたのですごく緊張しました。次にみほちゃんが発表しました。見学した中でも、一番上手に出来ていたところは、あきみちゃんによっちゃんの二人グループです。何がよかったかと言うと、あきみちゃんがアトムボーイ(回転寿し屋)の事を話しているときに、とっても言い方が上手だったから。(中略) 『アトムボーイでは、わたしのお母さんがはたらいているから一度来てみて下さい。』という言い方が、『上手だなあ』と思いました。(後略)

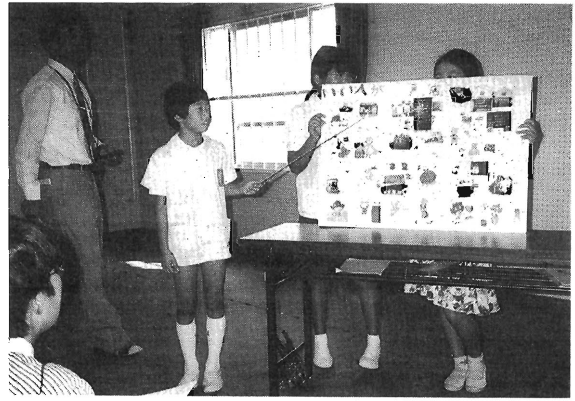
A子]

事例2) 「あと少しで発表会が始まります。そう思うと心ぞうの音がドキドキとはげしくなってきます。発表が始まると大ぜいの人があたたかい手をしてくれました。

他の班の子の発表と自分の班とをくらべて、わたしたちはちょっと声が小さすぎたんじゃないかなと思いました。かおりさんたちが言っていたリーフレンドの意味を私ははじめて知りました。その意味は、リーフレンドで働いているかん国人のおねえさんの名字がリーと言ってフレンドはその人の友だちという意味だそうです。だから、おねえさんの友人が来る店という意味です。(後略) T子]

子どもたちの作文を読んでいるかぎり、かなり緊張していたようだ。豊田市内より70名もの先生が参観に来ていたのだから無理はない。この日(9月21日)は、ポスターセッションによって、子どもたち自身が学習で街の写真を撮り、それを白ボール紙で貼り合わせ、マジックでポスターに仕上げるという方法で作品づくりを作った。イギリスより、まちづくり学習の専門家であるアイリーン・アダムス女史を招いての講演会に先立って実施された授業である。このときの様子を写した写真が右上の2枚である。

従来の社会科学習では街の中の公共施設の働きをくわしく調べてまとめるだけの学習であった。今回の試みは、街の中の素敵な場所や店、人たちなど町づくりの観点に立つ素材を選ばせた。



4. アイリーン・アダムス女史の講演

アイリーン・アダムス女史(サウスバンク大学教育研究所コーディネーター)をイギリスから招き、講演ツアーを各地で催すことを今回の研究に合わせて行った。筆者と荻原礼子氏(続・まちづくり計画室代表)の二人が名古屋地区と東京地区の会合責任者となり、ほかに数名のスタッフの努力により、今回の講演会が計画された。会場に元城小学校体育館をお借りし、授業研究会を同時に開催したのである。

アイリーン氏の講演内容は、イギリスの都市環境を主に美術の観点からとり上げたものであるが、校庭や街の中のデザイン、遊び場の構成などにも子どもの参加を促すアクティビティが必要と訴える内容であった。

イギリスでは、シビクトラスト運動が盛んで街の中の歴史的建造物を美的に残そうとする傾向が強いがそうした美のセンスにもかかわる指導活動も環境教育に含めていた。

多くのスライドによる講演、VTRによるイギリスの児童の生活や遊びには、伸び伸びとした雰囲気と美しい光景が写し出されていた。イギリスにおける環境教育が単に自然保護教育だけにとどまらない奥の深さと間口の広さがアイリーン氏の話し方に含まれていた。

5. おわりに

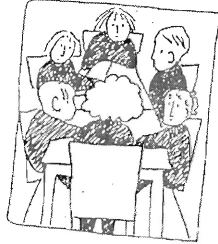
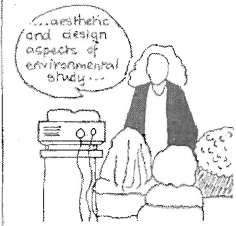
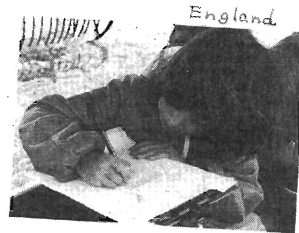
子どもの参加をまちづくりに生かすという方向性はまかりまちがえば、イベントに子どもをかり出したり、

1995.9.21~26



The British Way Of
Community Design
With Children

Ms. Eileen Adams
Lecture & Meeting Tour



最近わが国でも、学校、児童館、まちづくりグループ、そして行政のイベントで、子どもたちのまちづくりへの参加の例が増えています。そこで、環境学習の先駆国イギリスから長年現場で活躍し独自の手法を開拓してきたステキな女性をお招きし、各地で交流会を開きたいと思えます。★毎回テーマが違います。さあ、あなたの興味は・・・？

イギリスに学ぶ
子どもの参加とまちづくり

アイリーン・アダムズさん、講演と交流ツアー



●TOYOTA

9月21日(木) 会場 愛知県豊田市元城小学校
 ごご1:50 公開授業「子どもたちが作ったまちの写真地図」
 ごご2:45 講演「イギリスの学校におけるまち学習」
 主催/まちワーク研究会 共催/元城小学校

●NAGOYA

21日(木) 会場 名古屋市中区 玄々科学研修センター
 ごご6:30 講演「環境教育資源としての校庭」
 主催/IPA(子どもの遊ぶ権利のための国際協会) なごや

●TOKYO

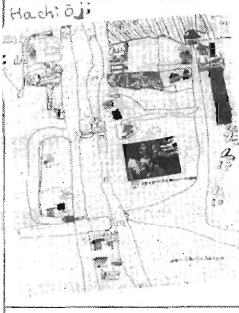
9月23日(土) 会場 世田谷区 成城大学7号館731号教室
 ごご1:00 メイン・シンポジウム
 各地の報告/高知、大阪、横浜、東京の事例、他
 講演「イギリスのまちづくりと子どもの参加」
 主催/まちワーク研究会 共催/AMR、せたがやまちづくり
 フォーラム、新しい保育を考える連絡会
 ごご6:00 ウェルカム・パーティー(於/砧区民会館2階)

●YOKOHAMA

9月24日(日) 会場 横浜市金沢区 横浜市立大学カメラホール
 ごご3:00 シンポジウム「わたしら市民が街に自然を呼び戻す」
 講演「地域環境学習とまちづくりセンター」&金沢での事例報告
 主催/「金沢水の日」実行委員会、横浜市立大学経済研究所

●TOKYO

9月26日(火) 会場 世田谷区下北沢タウンホール11階「ラプラス」
 ごご6時30分 講演「英国における住環境学習の現状と展望」
 主催/(財)住宅総合研究財団・住環境委員会



主催/総合プロデュース
まちワーク研究会

〒155 東京都世田谷区代田 2-35-11-305
 Tel.03-3414-8568 Fax 03-3413-7784
 結(ゆい)まちづくり計画室内

協賛 グレイトブリテン・ササカワ財団
ブリティッシュ・カウンシル

大人の都合に子どもの素直な意見を利用するといった身勝手さがつきまといがちである。

まちづくり学習という教育活動に仕立てるにせよ、本当に子どもの内発性にもとづく学習になるか疑わしい場合もある。子どもの切実な問題意識といっても、その問題づくりそのものが現代っ子には適合しない可能性もある。なぜかと言えば、生活に問題を感じない子どもが多いからである。子どもたち自身が、自分の住む街の中が危ないとか汚れている、遊び場が少ない、遊んでくれる大人や仲間がいない、時間がないなどと言った不満を述べない場合の方が多いのである。

子どもの参加とは、子どもたちが自ら、生活環境の改善の必要性に気づくことが最も大切な前提条件となるだろう。

(謝辞)

今回のまちづくり学習とアイリーン氏講演会の実現には、豊田市元城小学校校長 浜本晴之先生ほか、元城小学校の教職員の方々に大変お世話になりました。また、荻原礼子、IPAなごや支部の奥田陸子、千葉大園芸学部の木下 勇、まちワーク研究会メンバーの方々、各氏に記して感謝の意を表したい。

参考文献

子どもの遊びと街研究会(1984)：『三世代遊び場図鑑——街がぼくらの遊び場だ！』同研究会発行、169ページ。

寺本 潔(1988)：『子ども世界の地図——秘密基地・お化け屋敷・子ども道の織り成す空間』黎明書房、184ページ。

まち遊び研究会(1994)：まちづくり主体の育成のための「まち遊び」方法論構築に関する研究、住宅総合研究財団研究年報 No.21, pp. 201~210。

寺本 潔(1994)：『子どもの知覚環境——地図・遊び・原風景に関する研究』地人書房、268ページ。

(付記)

アイリーン・アダムス女史講演に関する中日新聞記事の写しを右上に掲載する。なお、本プロジェクトは、グレートブリテン・ササカワ財団とブリティッシュ・カウンシルの支援により、イギリスよりアイリーン氏を招くことができた。また、豊田市でのタウントレイルづくりでは、(財)レクリエーション協会研究助成の一部を使用した。以上の支援に深く感謝します。

子供らが街、道路、公園から学ぶ

住環境教育を

教室から外に出て、街や道、公園が自らを取り巻く環境から、子供たち自身に考えさせ、学ばせようという「住環境教育」の権威アイリーン・アダムスさんがイギリスから来日。名古屋、東京などで講演を行った。アイリーンさんは「教師は確定した事実、すなわち過去を子供に教えることはできる。でも、本当に大事なのは教師が知らないことを、子供が自分で考え、判断していく能力を身に付けさせること。」「住環境教育」はその能力アップに重要な役割を果たすと語る。

街づくりに加わることで

思考・判断力つく

環境学習と異なり、野生の環境だ。動物の保護やエルク、アイリーンさんはロンドンを通想したが、アン・サウスバク大学の環境デザインに対してアイリーンさんは、社会的、研究所研究員で、二十年近文化的なものとして考え、学校と地域、ロンドン近郊の村に「遊園生活」する街、を結び「住環境教育」の時、キャンプした子供たちが、導き、公園などが子供と、門を叩いて話している。の村を調べ、再生計画を立て

英の専門家アイリーン・アダムスさん



公開授業に参加したアイリーン・アダムスさん。愛知県豊田市元城小学校で

案、村人の前で発表させた。りするなどのニコク活、動を続けている。アイリーンさんは「街づくりに、子供の意見と反映、させることは、建築専門家、が気付きにくい視点を与えられる。また、子供たちは、これらロシエラに夢面、子供が事件や事故から子供を」と話している。

公開授業に参加したアイリーン・アダムスさん。愛知県豊田市元城小学校で。子供らと話し、街づくりに加わることで、思考・判断力をつくる。アイリーンさんは「街づくりに、子供の意見と反映、させることは、建築専門家、が気付きにくい視点を与えられる。また、子供たちは、これらロシエラに夢面、子供が事件や事故から子供を」と話している。

資料5 報道された講演会と研究授業

(中日新聞 1995年10月11日付 朝刊)